

# 1933 年のバウハウス閉鎖に関する一考察 — 「バウハウス宣言」から考える —

## A study on the Bauhaus closure in 1933 referring to “the Bauhaus Manifest”

福永 堅吾<sup>1)</sup>

**Abstract:** Bauhaus study has shown that its closure was due to the rise of the Nazism around since 1930. It has also maintained that the closure was not conducted by the Nazi Party, but by the Bauhäusler (Bauhaus people) themselves. When we look over the historical fact of the Bauhaus closure, we find such key terms as cultural Bolshevism, communism, and socialism, which Nazi was frantic to exclude. It is certain that many of Bauhaus students had the trend of communist thoughts, and this was seen as one of the reasons of the closure. However, we can also find some factors which would lead to the closure in “the Bauhaus Manifest” (1919). This article aims to examine the history of the Bauhaus closure referring to “the Manifest” in order to make it clear what kind of ideas Bauhaus originally had, and also whether the ideas had some factors which was exposed to Nazis censure.

**Keywords:** Bauhaus, Communism, Socialism, Nazism

### 1. はじめに

バウハウスは 1919 年の設立から 1933 年の閉鎖まで、ヴァイマル(1919-25)、デッサウ(1925-32)、ベルリン(1932-33)とその活動拠点を移していったが、その移転にはつねに政治的な事由が背景にあった。ヴァイマルにおける閉校の事情は、当地で勢力の強かった保守派からバウハウスの前衛的な芸術活動が忌避されたという、バウハウスが経験する 3 度の閉校のなかではまだシンプルな理由だったと言ってよい。しかし、残る 2 回の閉校にさいしては、ヴァイマルでの例とは異なり、おもに国家社会主義ドイツ労働者党(NADPA=ナチ)による文字どおり政治的な介入が強かった。デッサウでは、市からの予算を削減され、政権の一端を握ったナチにより、バウハウス閉鎖の動議を採択にまでもっていかれ、デッサウ市から追いやられた。その後、バウハウスはベルリンに活動拠点を移し再開するが、家宅捜索により「共産主義」のレッテルを貼られて、1933 年ついに息の根を絶った。

バウハウスはナチの勢力が強くなって以来、たしかにバウハウスは、「非ドイツ的」としてナチから排除の対象とされ、そのためにいわれのない弾圧を受けたというヒストリーを背負っている。ただし、すでに研究者[1]が注意を促しているように、ナチはバウハウスを第三帝国から排除しようと躍起になっていたが、バウハウスはナチによって閉鎖されたのではなく、バウハウスの人たちがみずから決定して閉鎖したことを、正確にとらえておく必要がある。

本稿では、バウハウス閉鎖までの最後の数年に着目し、バウハウスあるいはバウハウスの人たちがナチに対してどう抵抗し、何に抵抗できなかったのかについて考察し、第三帝国におけるバウハウス閉鎖の意味について論ずることとする。そのさい、ベルリンのバウハウス資料館の館長を務めたバウハウス研究者 Peter Hahn の論考の到達点を参照しながら、バウハウスの出発点である「バウハウス宣言」(1919)に立ち返り、その中にすでに閉鎖へとつづく道が開けていたことを確認したい。

### 2. 1933 年までのバウハウス — ナチ台頭とバウハウスへの攻撃の変遷

まず、1930 年前後からバウハウス閉鎖の 1933 年までの流れについて、バウハウスが拠点にした各地におけるナチの台頭の経過をたどりながら、その都度、どのようにバウハウスに対する攻撃が変化していったのかを確認することにした。周知のように、1929 年の世界大恐慌を経て、ナチが台頭したのが 1930 年の帝国議会選挙においてであった。1933 年は、言うまでもなく、ヒトラーが政権を掌握した年である。

1929 年 12 月のテューリンゲン州議会選挙においてナチは 6 議席を獲得するが、ナチが権力の一端を握ったのはこの選挙が最初だった。1930 年 1 月、内相兼国民教育相にナチ党員のヴィルヘルム・フリックが就任し、彼は公立学校の

---

<sup>1)</sup> 東京都立産業技術高等専門学校 ものづくり工学科、一般科目

Hochschule für Baukunst und Handwerk(建築芸術・手工芸大学)を閉校して、ナチ寄りの建築家パウル・シュルツェ＝ナウムブルクに新たな国立学校の設立を命じた。この学校は、当時すでに閉校していたバウハウスのヴァイマル校舎を利用したものである。ナウムブルクは、ヴァイマル校に描かれていた画家でバウハウス教師のオスカー・シュレンマーの壁画を取り壊し、またフリックは、ヴァイマル州立博物館に展示されている絵画のうち近代絵画を撤去させ、近代以前の芸術作品と入れ替えさせた(Droste, 2001, p.227)[2]。いわば「バウハウスのもの」の排除がはじまったのである。

1931年10月のデッサウ市議会選挙では、ナチは36議席中19議席を獲得し、市会議長にパウル・ホフマンが就く。彼もナチ党員である。これにより公的なバウハウスの支援体制が崩壊しはじめ、ナチによる攻撃が激化する。当時のデッサウ市長フリッツ・ヘッセと当時の校長ミース・ファン・デア・ローエはこれに対抗した。1932年1月の選挙においてナチは多数派に躍進し、バウハウス閉鎖に向けた動議をいくつも提出したが、ヘッセと社会民主党、および共産党の市議会議員らの反対多数により、いずれの動議も採択には至らなかった(Droste, 2001, p.227)。

1932年7月、デッサウ市の属するアンハルト州の政府長官アルフレート・フライベルク(ナチ党員)は、前述のシュルツェ＝ナウムブルクを伴ってバウハウスの視察を行い、徹底的にバウハウスを批判する意見書を作成した。翌8月には、バウハウス教職員への給与を含め、デッサウ市から資金は一切出さない、そして9月末をもってバウハウスを閉鎖するという動議が採択された。これに反対したのはヘッセ市長と共産党員4名のみで、社会民主党は、これまでのバウハウスの擁護が原因で支持率を下げたとして、保留に回ったのである(Droste, 2001, p.228)。

1932年10月、バウハウスはベルリンへと移転するが、1933年1月にアドルフ・ヒトラーが政権を掌握すると、すぐにデッサウ検事局内にバウハウスの調査委員会が設置され、バウハウス・ベルリン校は捜査を受ける。同じ頃、デッサウ校にあったバウハウスの蔵書がデッサウ市からベルリン校に送られ、その中に「共産主義的」な雑誌が「発見」された[3]。この「証拠」をもってベルリンのゲシュタポはバウハウス・ベルリンを強制捜査に入り、同年4月、ベルリン校を封鎖する。これを受けて、すぐに校長ミース・ファン・デア・ローエは「ドイツ文化のための闘争同盟」の代表アルフレート・ローゼンベルク(彼はバウハウス閉鎖に関与していたといわれる)と会談し、バウハウス再開に向けて直談判したが、とくに成果を得られなかった(Droste, 2001, p.233-236)。その後ミースはゲシュタポのヨーゼフ・ゲッベルスとの面会を重ね、同年7月にゲシュタポから学校再開の通知が届くが、そこに条件として、ルートヴィヒ・ヒルバースアイマーおよびヴァシリー・カンディンスキーを教員から除籍し、代わりにナチ党員の教員を入れること、そしてナチ寄りのカリキュラムを作成することが要求された(村上, 2007, p.222)。この通知を受け、ミースはバウハウスの教員を招集して状況を説明し、バウハウスの解散を全員一致で決定した(Droste, 2001, p.236)。

以上、1933年の解散にいたるまでの経緯を簡単にではあるがたどった。つぎに、バウハウス閉鎖に関してこれまで先行研究が指摘してきた成果を見ながら、バウハウスがナチの攻撃対象として格好の材料となったであろう、バウハウスの共産主義的な要素を担っていた学生の存在について確認する。

### 3. バウハウスの学生 ― 共産主義の細胞組織

前項において確認したように、ナチが政権の一端を掌握するようになると、バウハウスでも共産主義的な学生の存在は看過できず、多くの学生が退学処分を受けた。これについて、Droste(2001)は、初代校長ヴァルター・グローピウスのあとを継いで、1927年から30年までバウハウス第2代校長を務めたハンネス・マイヤーの存在が大きいと指摘している(pp.196-200)。マイヤーが校長に就任した1927年には、共産主義の細胞組織が徐々に形成されつつあり、その数は7名だったのが、彼が退任する1930年には36名にまで増員していたのである。それというのも、マイヤーは就任当初から、バウハウスが工房で生産するものは、社会の必要を満たし、耐久性や価格など、社会的な基準を満たすべきとする理念を取り入れて、バウハウスを「社会的政治的」に改造するという試みにでたのである。共産主義を信奉する学生たちは、マイヤーの理念に親和性を覚え、とくに先鋭的な学生たちはバウハウスの知的環境を席卷していった(Droste, 2001, p.196)。当時、学生が書いたレポートにはつぎのようにある。

この時期、政党共産主義が学生たちの間にしっかりと根を下ろした。(……)そのため若い<sup>バウハウスラー</sup>バウハウスの人たちは、やすやすと共産主義細胞にオルグされ、党員になってしまうことが多かったのである。こうして共産主義グループは学内に極めて強力に浸透した。(Droste, 2001, p.196) [4]

マイヤーがバウハウスを辞するきっかけとなったのは、1930年に学生たちが学内のカーニバルで共産主義の歌を歌

ったことだった。右派寄りのマスコミがこれに反応し、当該の学生のみならずマイヤーをも新聞上で攻撃した。結果的に、関係した学生は停学、場合によっては退学処分をも下された。この件をきっかけにしてデッサウ市長ヘッセは、自身も共産主義者であるハンネス・マイヤーの解任を求めたのである。ヘッセ、マイヤーの両者は調停を求めて裁判所に持ち込むことで合意し、これを契機としてマイヤーは校長を辞職した(Droste, 2001, p.199)。バウハウスのイメージが悪化することには、デッサウ市長ヘッセは危機感を抱くはずである。前項で確認したように、後年ナチによってデッサウ校の閉鎖の動議が提出されるたびに、ヘッセは反対の姿勢を崩さなかったが、それというのも、バウハウスがヴァイマルから移転するさいに、尽力してデッサウ市に誘致したのはヘッセであり、デッサウ校が共産的という誹りをナチから受けることは、つまり、彼自身の立場を危うくすることでもある。マイヤーをバウハウスから追放したのは、ヘッセの保身としての当然の行動であった。

しかし、マイヤーの解任をもってバウハウスから共産主義の色が完全に消えたわけではない。後任の校長にミース・ファン・デア・ローエが就任すると、1930年と翌31年の2度にわたり、左翼的な学生の退学処分を行ない、かつてマイヤーによって共産主義の細胞が育つ土壌に改造されたバウハウスを、彼は徹底的にバウハウスの非政治化を図った。それでも学生たちの抵抗は続き、マイヤーの罷免とミースの就任について共産主義的な学生は季刊誌 *Bauhaus 3* (1930)のなかで、一連の決定に関わった教師陣を厳しく批判した。また1932年には“Kostufra”[5]が組織され、のちにベルリン校が閉鎖されるまで匿名で活動が続けられた。

ナチ政権下においては、共産主義、文化ボルシェヴィズムは、「非ドイツ的」として排除されるべき対象とみなされたことは、よく知られる。上に確認してきたように、バウハウスには攻撃する材料が揃っていたわけだが、Hahn(1985)は、とくに1930年代に入って、バウハウスは「ユダヤ的」、「文化ボルシェヴィキ的」とであるという烙印を押されて攻撃を受けるようになったと述べている(p.42)。ただし、村上(2007)によれば、実際にバウハウスの教員の中でユダヤ人であったのは1名のみで、学生の中にもユダヤ人は少数で、つまりこれは、ナチによって攻撃すべき材料がでっち上げられたものである(p.217)。後者の「文化ボルシェヴィキ的」という点についても村上は、社会主義あるいは共産主義の教員はバウハウスには確かに存在したが、決して多数を占めていたわけではないと指摘しており、先述したように、ミース・ファン・デア・ローエの在任期間には、2度にわたって学生の処分をしている。さらには、バウハウスにはナチズムを信奉する学生までも存在し、バウハウス・ベルリン校が閉鎖されたさいには、ゲッベルスに対してバウハウスがいかに「ドイツ的」で、第三帝国における文化的必要性があるかを手紙に書いて再開を懇願しており、それゆえ、「ボルシェヴィキ的」ということで攻撃を仕掛けるのは、完全にナチのデマゴグであったと述べている(村上, 2007, pp.217-18)。

では、なぜナチはバウハウスの「何」を排除しようとしたのか。以下、この点についてHahn(1993)の議論を参照しながら、バウハウス閉鎖の意味を考えていくことにする。

#### 4. バウハウスのジレンマ―バウハウス宣言を考える

Hahn(1993)は、バウハウスがつねに左派的とみなされ、政治的な攻撃が止まなかった原因を、その設立時に掲げられた綱領や「バウハウス宣言」(1919)にあり、つまり、バウハウスが従来のアカデミー中心の芸術教育の構造を問題視し、そこからの脱却をはかるところからスタートした時点で、すでに敵を作ってしまったのだと考える(p.204)。後世から見れば、バウハウスが工業デザインにおける主導的な存在であったという評価が可能であるが、しかし同時にそれは当時の人々に、従来の伝統的な、「ドイツ的な」工芸の形を変えてしまうのではないかという懸念を生んでしまった。「あらゆる造形活動の最終目標は建築である！」の一文からはじまる「バウハウス宣言」にはこうある。

(……)建築家、画家、そして彫刻家は、たくさんの手足をもつ建築の姿を、総体的にも部分的にも、もういちど知り、理解するしかない。そうしてかれらの作品はもういちど、サロン芸術のなかでなくなってしまった建築の精神でおのずと満たされるだろう。

旧来の芸術学校はこの統一を生み出すことができなかったし、生み出そうとしなかった。なぜなら芸術というものは教えられるものではないからだ。芸術学校はもういちど工房のなかで合併するしかない。工房という、意匠デザイナーや工芸家がデッサンしたり絵を描いたりするだけの世界は、最終的にはもういちど建築する世界になるしかない。[6]

「宣言」の骨子は、あらゆる芸術ジャンルや職種が一丸となって、共同作業としての建築のもとに集結することをめざす、

という点である。旧来のアカデミーによる教育はその共同作業できなかったと批判し、「ともに未来の建築をつくろう」と呼びかけるのである。「選択の余地が他にはない」という意味をもつ助動詞の *müssen* が「宣言」のドイツ語に多用されているところに、「芸術が生き残る道は他にはない」という強いニュアンスを出しているのが読み取れる。しかしバウハウスは出発点において、「社会的要請」、つまり「理論と教育、そして実践面において、造形、建築、住居、都市建設などの問題に関わる」要請を「宣言」のなかに書き込んだために、「バウハウスと敵対する人々からいかがわしいと思われていた」と Hahn(1993)は述べる(p.204)。

先に見たように、テューリンゲン州政府のなかでバウハウスを支援していたのは、社会民主党や共産党である。かれらがバウハウスを支援したのも、おそらくはバウハウスが最初に打ち立てた、ある種のユートピア的な理念があつてこそではないだろうか。「宣言」は、有名なライオネル・ファイニンガーの版画が印刷されており、そこにはゴシック建築の大聖堂が描かれている。ゴシック大聖堂は 20 世紀の初頭にあって「総合芸術の比喩であり、社会的なまとまりの象徴」(Droste, 2001, p.19)としての存在である[7]。1923 年、バウハウスがはじめてヴァイマル校で開催した展覧会のチラシに、オスカー・シュレンマーは「国立バウハウスは(……)『社会主義の大聖堂』を建てたいというすべての人の集結地になるのだ」(Wingler, 1969, p.65)と書いている。バウハウスの 1933 年へとつながる材料を、早くもバウハウスは敵に提供してしまったのも同然なのである。バウハウスを支えた社会民主党、共産党が右派に抵抗できなくなったときには、バウハウスの存続はありえないが、かれらの支援がなくなってもバウハウスの存続は約束されていない。これはバウハウスにとって、ジレンマでもあった。生きるためには、敵からの視線をたえず浴びつづけなければならなかった。

## 5. おわりに

すでに述べたように、バウハウス・ベルリン校が封鎖されたさい、ミース・ファンデア・ローエはゲッベルスと何度か面会を重ねて、のちに条件つきで再開の許可の通知を受けた。しかし、バウハウスを解散したのだ。バウハウスの関係者が、個々人がバウハウスに寄せる思い出や当時の記録を書き起こして寄稿した追想集『バウハウスとバウハウスの人たち』(1964)のなかで、初代校長のヴァルター・グローピウスは「私は今、バウハウス理念がその成長の過程で経験してきた浮き沈みや勝利と敗北を、より客観的に距離を持って振り返ってみることができる」と書いている(ノイマン, 2018, p.17)。バウハウスが解散したのちにグローピウスが振り返っている「勝利」とは、何を意味するのか。

1932 年、グローピウスは、ニューヨーク近代美術館で開かれた “Modern Architecture: International Exhibition” において、現代建築家の代表的なひとりとして紹介された[8]。そして 1938 年には同じ近代美術館で、グローピウス監修のバウハウス展が開催された。この 2 つの展覧館のあいだにバウハウスは解散し、多くのバウハウスの関係者が亡命し、中には第三帝国に留まった関係者もいた。グローピウスはこれらの催し物にさいしてバウハウスに言及したことはなかったという。Hahn(1993)は次のように見る。1938 年の展覧会はグローピウス時代のバウハウスの自己演出であり、バウハウスで打ち立てた理念を、ドイツから離れた新天地のアメリカで完徹しようという試みが、彼にとっては問題であった。つまり、勝利というものがあつたとすれば、彼がアメリカに現代建築の代表者として紹介されたことが彼にとっての勝利であり、ナチに対する勝利では決していない(p.213)。これはミースにおいても同様であった。1938 年にアメリカに移住し、シカゴ大学で教授の職を得たときから、ナチがバウハウスに対して行ってきたことについて、何かしらの意見を表明することはなかったという点から、ミースの態度が読み取れる。ただひとりハンネス・マイヤーにあっては、1936 年に母国スイスに帰国したもの共々コミュニストと誹りを受け、メキシコに旅立つという労苦を背負ったのだった(Hahn, 1993, p.211, p.214)。バウハウスの人たちにとって勝利が訪れるのは、バウハウスの閉鎖のときにはなく、バウハウスについてもはや考えずにすむようになったときであり、その勝利は、バウハウスというユートピアが文字通りの意味でユートピアと化したことを証明する。辞書には “utopia” は “nowhere (どこにもない場所)” と説明されている。

## 注

- [1] たとえば Hahn(1993), Nerdinger(1993)。
- [2] ナチの「第三帝国」が定義した「芸術」については、本村(1997)が詳しい。
- [3] この「発見」された「証拠」は、デッサウで何者かに仕込まれたものと考えられている(Droste, 2001, p.233)。
- [4] 筆者の責任で、引用の訳語を一部変更した。
- [5] kommunistischen Studentenfraktion (直訳すれば「共産主義学生会派」)の略。
- [6] Droste(2006, p.14)に掲載された「宣言」のドイツ語原文を筆者が訳出した。傍点は原文における強調を示す。



- [7] バウハウスの理念の源流はアーツ・アンド・クラフツ様式のウィリアム・モリスにあり、彼が範としたのもゴシックの芸術(とくに手工芸)であった。モリスはイギリスの社会主義運動の歴史を紐解けば、そこに必ず名前が見つかる人物でもある。
- [8] 福永(2020)参照。なお、福永(2020, p.11)においてバウハウスの閉校の年を「1932 年」としているが、言うまでもなくこれは「1933 年」の誤りである。お詫びして訂正したい。

## 参考文献

- Droste, M. (2001). *Bauhaus 1919-1933*. (Nakano, M., Trans.). Taschen.
- (2006). *The Bauhaus 1919-1933: Reform and Avant-Garde*. (Sommer, M.R. & Gladbach, B., Trans.). Taschen.
- Hahn, P. (ed.) (1985). *Bauhaus Berlin: Auflösung Dessau 1932, Schliessung Berlin 1933, Bauhäusler und Drittes Reich : eine Dokumentation*. Kunstverlag Weingarten.
- (1993). Wege der Bauhäusler in Reich und Exil. In: Nerdinger, W. (ed.). *Bauhaus-Moderne im Nationalsozialismus: Zwischen Anbiederung und Verfolgung*. Prestel-Verlag, 153-178.
- Nerdinger, W. (1993). Bauhaus-Architekten im ›Dritten Reich‹. In: Nerdinger, *Ibid.*, 202-213.
- Wingler, H. (1969). *The Bauhaus: Weimar, Dessau, Berlin, Chicago (2nd ed.)*. (M., Stein, J., Gilbert, B., & Jabs, W., Trans.). MIT Press.
- ノイマン, E. (編) 向井周太郎・相沢千加子・山下仁 (訳) (2018). 『バウハウスの人々―回想と告白』 みすず書房
- 福永堅吾. (2020). 「ヴァルター・グロピウスの『インターナショナル・スタイル』的側面についての考察」. 『東京都立産業技術高等専門学校研究紀要』, 14, 11-14.
- 本村健太.(1997). 「ナチ時代のバウハウス―バウハウス様式と国家社会主義―」. 『岩手大学教育学部研究年報』, 57(1), 1-12.
- 村上俊介.(2007). 「バウハウスにおける反・反近代の意味」 桑野弘隆・山家歩・天畠一郎編『1930 年代・回帰か終焉か』 社会評論社, 200-229.